

黙示録1章1-3節 「イエス・キリストの現れ」

1A イエス・キリストの黙示

1B 世に対する現れ

2B 教会に対する励ましと悔い改め

2A すぐに起こるべきこと

3A しもべたちへの使信

4A 神のことばとイエス・キリストの証し

5A 預言のことばの朗読と聞き守る者

6A 時の接近

本文

黙示録シリーズの学びを開始します。今晚は、冒頭の言葉、1-3 節を見ていきたいと思います。
「**1 イエス・キリストの黙示。神はすぐに起こるべきことをしもべたちに示すため、これをキリストに与えられた。そしてキリストは、御使いを遣わして、これをしもべヨハネに告げられた。2 ヨハネは、神のことばとイエス・キリストの証し、すなわち、自分が見たすべてのことを証した。3 この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを守る者たちは、幸いである。時が近づいているからである。**」

私たちは、前回、ダニエル書を終わりました。ダニエル書を学んでいる中で、いかに黙示録がダニエル書を基本的な枠組みにして書かれているかを知りました。それで黙示録を見ていきたいと思えます。ダニエル書を今回学ぼうと思ったのは、世の終わりの兆しを人々が感じている中で、私たちキリスト者がいかに生きていくべきなのかを知るためです。つい、先週から、ロシアがウクライナに侵攻しました。ますます、今、何が起こっているのかを、主の目線からしっかりと見張り、キリストの内に堅く立っている必要があります。黙示録の学びで、その目線を身に着けていきましょう。

1A イエス・キリストの黙示

1B 世に対する現れ

1 イエス・キリストの黙示。

使徒ヨハネは、自分の書き記そうとしていることの主題を、非常に端的に記しています。「**イエス・キリストの黙示。**」ということです。黙示録の主題は、イエス・キリストの黙示、すなわち啓示、現れだということです。ヨハネは、福音書においても、「1:1 初めに、ことばがあった」と記して、神が人となられたイエス・キリストを証言するのだということを冒頭に書き、第一の手紙でも、「1:1 初めからあったもの」と書き出して、それは「いのちのことばについて」と書きました。黙示録では、「**イエ**

ス・キリストの黙示」です。彼の目は、イエス・キリストご自身に向いており、この方が現れることを書くのだと言っています。

「黙示」という言葉を日本語の聖書は使っていますが、かなり語弊があります。これは、「啓示」と訳すべきものです。中国語も韓国語も「啓示」と訳しています。ですから、「イエス・キリストの啓示。」となります。ギリシア語は、ἀποκάλυψις(アポカリュプシス)です。これは、「覆いが除かれる」という意味です。イエス・キリストの栄光が、これまでになく全てが明らかにされる、ということであり、ある人がこの言葉を、次のように例えました。市役所の前に、有名な彫刻家の彫刻の除幕式があることを想像してください。町の人々が集まってきて、市長があいさつをします。楽団がファンファーレの音楽を奏でて、そしてついに、彫刻を覆っていた幕が取り除かれます。そして、今まで隠されていたその彫刻の全容が、はっきりと現われ、明らかにされます。

聖書というのは、神がご自身について、そのお姿を次第に明らかにしておられる書物です。難しい言葉を使えば、漸次的啓示でしょうか。少しずつ、明かにしていくということです。旧約の時代から、神はご自身を明らかにしていかれ、ご自身の本質を御子において完全に現わして下さった、ということです。「ヘブル 1:1-3 神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られましたが、2 この終わりの時には、御子にあつて私たちに語られました。神は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。」旧約時代には、預言者がイスラエルの民に語られていたが、終わりの時になって御子にあつて語られ、御子は神の栄光の輝きで、神の本質の完全な現れです。

それで、イエス様は、ご自分のことを証しするために聖書が書かれていることを教えられました。「ヨハ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているものです。」よみがえられてからは、弟子たちに教えられています。「ルカ 24:27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」

私たちはダニエル書で、ダニエル自身は啓示が与えられても、それを十分に理解できなかったところを読みました。御使いが、それは終わりの時まで封じられているからだと言え、その知識を得られるまで人々が探りまわること話しました(12:4)。そしてイエス様が、弟子たちに、多くの預言者や義人が見たいと思っていたこと、聞きたいと切に願っていたことを、あなたがたは今、見ていて、聞いているのだから幸いだと言われました(マタイ 13:16-17)。使徒ペテロも第一の手紙で、自分たちの時代に、聖霊によってこの啓示が与えられたのだと教えています(1:11-12)。

それから、私たち教会が、御霊によって、イエス・キリストについての栄光が心に明らかになることを、礼拝で読んでいっているところのコリント第二にあります。「3:16しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。」「4:6「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。」このようにして、キリストにある神の栄光が御霊によって、心の中に照り輝きます。

そして、最後の使徒ヨハネが生きていた紀元 90 年代に、聖書の啓示がイエス・キリストにあって極みに達します。旧約聖書における預言も含めてまだ明らかにされていない部分を明らかにしていきます。イエス様が初めに来られた時の事の預言は、三百以上あると言われてはいますが、それらはすべて成就しました。しかし、再び来られることについての預言は千五百以上あると言われています。黙示録は、死んでよみがえられたイエス様が、再び来られることを預言しています。それで、旧約聖書からの引用は五百とも七百とも言われています。新改訳 2017 の聖書の、引照部分を見るだけでも、いっぱい詰まっているのがお分かりになるでしょう。

ところで、黙示録には主に二つの場面で構成されています。一つは、天です。天の御座、主なる神の王座があり、そこで御使いや長老たち、贖われた人々が礼拝し、賛美している姿が現れます。そしてもう一つは、地上の姿です。天における、聖なる神の御怒り、子羊の御怒りが地上に下っています。国々が騒ぎ、天地は揺れ動き、そして反キリストと悪魔があがきます。最後のあがきをするのです。自分たちの終わりが近いので、あがいているのです。天の御国が激しく地上に攻め入って来て、最後の反攻をするのですが、それも空しく、火と硫黄の池の中に投げ入れられる、という流れになっています。イエス・キリストが現れるのが近づくにつれて、悪が騒ぎ立つというのが世の終わりの姿であり、私たちは今、それを世界で見ているとあってよいでしょう。

2B 教会に対する励ましと悔い改め

そして、主が来られるのが近いので、教会にとって励ましが必要でした。また悔い改めが必要でした。ヨハネがこの啓示を受けたのは、紀元 90 年代と言われています。ですから、教会が始まったのが紀元後 30 年辺りと言われてはいますから、既に 60 年以上経っているのです。既に二世、三世になっていました。ヨハネの他の使徒たちは、全て殉教しました。そのような中でヨハネは、教会の中には愛が冷えていたのを見たのでしょう。霊知と呼ばれるもの、グノーシス主義の影響を受けた異端が猛威を振るっており、主が初めに命じられていたこと、「わたしが愛したように、互いに愛し合いなさい。」という戒めが横に追いやられていました。使徒ペテロが言ったように、「1ペテロ 4:17 さばきが神の家から始まる時が来ているからです。それが、まず私たちから始まるのであれば、神の福音に従わない者たちの結末はどうなるのでしょうか。」とあります。二世、三世になっている中で、教会には堕落と背教の兆しが見えていたのです。それで、七つの教会に対して主が語られたことをヨハネは書き記しました。

しかし、世においては患難があります。90年代には、教会に対する迫害が、激しくなっていた頃です。教会に対する迫害は、初めは、ユダヤ人の不信者からの迫害でした。けれども、ローマもまた迫害を始めました。皇帝ネロによるものが初めてです。紀元64-67年に起こりました。彼がローマに火を付けたのではないと言われていますが、その火事をキリスト者のせいにしてしまいました。それで、キリスト者は十字架に付けられたり、野獣に殺されたり、火あぶりの刑にされたり、当時のネロは悪霊に付かれていたのではないと言われるほど、気が狂っていました。パウロがテモテへの第二の手紙を書いたのは、その時です。67年頃に書かれたのではないかとされています。

なぜキリスト者がローマから迫害されたのか？福音が爆発的な勢いで拡がり、教会がローマの中に広がったのですが、ローマには皇帝崇拜がその社会の中に組み込まれていました。皇帝は、「主また神」と呼ばれ、また、「主であり救い主」と呼ばれました。そこでキリスト者が、イエスが主また神であられ、主であり救い主であると言っていたのですから、真っ向からその信仰告白が対立していました。そして人々は、ローマの神々への供え物や香をたくことが、慣習としても法としても義務づけられていましたが、キリスト者はそれを行ないませんでした。また聖餐式も、「キリストの体と血を食べて、飲んでいる。」という噂が広まり、人肉を食べているという噂もあったそうです。それから、奴隷が主人と同じ席で食事をしています。これでは社会秩序が乱れるという脅威がありました。また像を持たないので、無神論者であると非難されました。皇帝礼拝についてですが、イエスが救い主と言っても彼らは多神教なので、一行に構いませんでした。問題は、この方のみが救い主と主張したことだったのです。分かりますね、そう、私たちが日本社会に生きていて、その文化や体制が例外的ではなく、初代教会のキリスト者と同じようなものを共有しているのです。

そして、迫害も絶えず行なっていた訳ではなく、容認の時期もありました。ネロの迫害の後、ウェスパシアヌスとティトゥスは、キリスト教は容認していました。その後、皇帝ドミティアヌスが迫害を強めます。理由は、ユダヤ教の唯一神の信仰でありました。キリスト教もその中の一つとみなされ、事実、神は唯一だと信じていましたから、それで迫害をしていたと言われています。その時に、ヨハネも迫害を受けました。そしてパトモス島に流刑になりますが、その時に黙示録の啓示を受けます。ドミティアヌスが96年に死んで、次の皇帝になった時にヨハネは釈放されて、それでエペソで啓示を書き記して、それで黙示録があるとされています。

2A すぐに起こるべきこと

次に、「**神はすぐに起こるべきことを**」とあります。

ここの「**すぐ**」という言葉は、もっと正確に言うならば「速やかに」という意味です。同じ言葉がルカ18章8節で使われています。「あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。」例えば、津波警報が出たけれども、一度、津波が来たら速やかに水が押し寄せます。今回も、ロシアがウクライナに全面侵攻を始めたなら、一気に様相が変わり、世界が変わ

りました。たった今、起こるというよりも、いつでも起こり得ということ。そして、起こったら速やかにこれらのことは進んでいく、ということです。

このような切迫性を、主の来臨について神は私たち教会に教えています。主ご自身は、「マタ 24:44 ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。」と言われました。パウロも、主が盗人のように来ると言われたことを踏まえて、次のように言っています。「I テサ 5:2-3 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。3 人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」

3A しもべたちへの使信

次にヨハネは、「しもべたちに示すため、これをキリストに与えられた。」と言っています。

しもべたちに伝えるのに、神がキリストに与えられた啓示です。イエスはこのことについて絶えずお語りになっていました。ヨハネが福音書で書いたものに、それが何度となく出てきます。例えば、ヨハネ 5 章 19-20 節です。「まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子ども同様にを行うのです。20a それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。」父と子の関係を知っている人は、自分で思い浮かんだことを語ろうと言う気持ちが起こりません。御子は御父に愛され、御父に示されること以外のことを語られたり、行なわれたりするつもりは何一つありませんでした。ゆえに、父と子は一つであり、ご自分で独立して何かをされることはなかったのです。

そして次に、「そしてキリストは、御使いを遣わして、これをしもべヨハネに告げられた。」とヨハネは言います。父なる神から与えられたものを、しもべヨハネに直接伝えたのではなく、御使いを遣わされることによって告げられました。私たちは、御使いの活動についてそれほど気にしないでいきます。けれども、聖書は、全知全能の神でありながら、ご自身が造られた霊的存在、天使たちを通してご自身のことを行われていることを描いています。

キリストご自身が御使いを遣わされますが、ご自身も旧約時代には主の使いとして現れました。ヨシュアに対しては、主の軍の将として現れてくださいました。士師記において、士師ギデオンにも、「シャローム」と言って現れてくださいました。

そして、主に仕える御使いたちがたくさんいます。ダニエル書には、神の言葉を伝える御使いガブリエルがおり、特に重要なのはキリストが来られることをダニエルに伝えたのが、ガブリエルです。8 章の、ギリシアから出る、荒らす忌まわしいものを伝えたのはガブリエルです。そして、9 章

の聖なる都とユダヤ人について、七十週が定められていると告げ、油注がれた者、メシアが断たれることを伝えました。そして10章では、戦う御使いミカエルの姿も伝えています。イスラエルのために戦っています。そしてエゼキエル書にも天使的な存在はいますし、ゼカリヤ書においては、御使いが大活躍しています。

イエス様の地上の生涯には、御使いの奉仕は欠かすことのできないものでした。マリアがイエス様を身ごもったのを伝えたのは、ガブリエルです。そして、イエス様が荒野において誘惑を受けられて、その後に仕えたのも御使いであります(マルコ 1:13)。そして、主がゲツセマネの園で苦しみ悶えて祈られた時も、御使いが助けに来ました(ルカ 22:43)。そして、主が復活された時に、大地震が起りましたが、それは御使いが来たからです(マタイ 28:2)。そして、主が昇天された時も、弟子たちに主が戻って来られることを伝えたのは二人の「白い衣を来た人(使徒 1:10)」でしたが、御使いでしょう。そして使徒たちも、御使いに助けられており、例えばペテロが牢獄から出てきたのは、御使いのおかげでした(12:7)。それで、使徒ヨハネにはこの啓示と預言を受ける時に、絶え間なく彼に助け、仕えてくれているのです。

私たちは、霊的な存在としては神ご自身とキリストだけで、あとは悪の勢力であるサタンや悪霊どもは意識していますが、神に仕える霊的存在、御使いたちが主権と権威、力をもって存在し、私たちを助けるためにも神に仕えていることを忘れてはいけません。

ところで、「告げられた」という言葉ですが、英語では signify という訳が使われています。「認証」というような意味ですが、ギリシア語では、「しるしや象徴によって、明らかにする」という意味です。黙示録には、多くのしるしや象徴が多いです。ヨハネは、福音書の中にも「しるし」という言葉をたくさん使いました。真理を示すためのしるしです。それで、多くの人はしるしや象徴の多い黙示録の意味が難解だとして、避ける傾向があります。けれども紀元前後のユダヤ人の間では、黙示文学というのは広まっていて、こういった文体のものはかなり多かったようです。旧約時代も、ダニエル書、ゼカリヤ書、エゼキエル書にも、しるしや象徴による啓示が多く与えられています。

しるしや象徴だからといって、黙示録は難しいということではありません。一つは、旧約聖書からの引用が膨大にあるということです。かつて預言者によって語っていたものがありますから、どのような文脈で使われていたのかを容易に見つけることができます。もうすでに、私たちはダニエル書という背景が色濃いことを学びましたから、自分流の解釈ではなく、ダニエル書にある流れを踏まえた上での解釈ができます。

そして、もう一つはあまり難しく考えてはいけない、ということです。イエス様の喩えにも起りがちですが、イエス様は一つの要点を語るために喩えを使われたのであって、そこに隠されている意味を細かくいちいち読み解くために使われたものではありません。要は、このことを言いたいとい

うものがあり、その意図と目的をつかみさえすればよいのです。例えば、十人の娘の喩えで、油が何を意味しているのか？ということで聖霊を意味しているとなりますが、そうすると愚かな娘も聖霊を持っていたわけで、救われた人がどうして、主の来臨を見失うのか？という議論になります。イエス様は、そういったことを言われたのではなく、要は、「用意していなさい」ということを言いたかったわけです。同じように、黙示録における象徴的表現も、その象徴自体の隠された意味よりも、真理を明らかにするための助けです。そのような形で、ヨハネに示してくださっているのです。

さらに、将来の事柄についての預言でありますから、当時の社会ではあり得ないことも語らなければいけません。しかも、当時存在するものによって表現しなければいけません。ヨハネがたとい現代に起こることを預言したとしても、当時は存在しないものを語る時、他の比喩が使われていることがあります。例えば、火による災いという時に、それがもしかしたら、火力の兵器のことかもしれません。けれども現代兵器をヨハネは当然知らないので、当時ある言葉でその幻を表現したという可能性はあるのです。

4A 神のことばとイエス・キリストの証し

²ヨハネは、神のことばとイエス・キリストの証し、すなわち、自分が見たすべてのことを証した。

ヨハネは、福音書においても、手紙においても、注意深くこのことを行ないました。自分の言葉ではなく、神ご自身の言葉をそのまま聞き、それを書きとめました。そのために、最後に、イエス様がこれらのことは取り除いてはいけなく、付け足してもいけないとこの書について戒められています。「22:18-19 私は、この書の預言のことばを聞くすべての者に証しする。もし、だれかがこれにつけ加えるなら、神がその者に、この書に書かれている災害を加えられる。19 また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、神は、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、その者の受ける分を取り除かれる。」

これほどヨハネが、注意深く、神のことばを証したと言っているのですから、神のことばとして黙示録を重んじるべきです。教会では、おざなりにされる傾向があります。これを過去の文学であるかのごく過去に閉じ込めたり、あるいは、私的解釈をして人々を煽ることをします。どちらも自分の理解の中で黙示録を閉じ込めようとするのです！けれども、ヨハネはしもべでした。示されたこと、語られたことを、そのまま受け取りました。私たちも、同じように、主を恐れつつ、そのことばを受け取っていきたいと思います。

そして、ヨハネは、「**神のことば**」と「**イエス・キリストの証し**」と密接に結びついていることを話しています。神のことばでありながら、そのことばに、イエス・キリストが証しされているのです。これは福音書にも表れていました。「1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」そして、ことばが肉となって現れたのです。黙示録でも同じことが語られています。天の

情景があまりにもすばらしいので、ヨハネが、思わず御使いを拝もうとしてしまいました。御使いは言いました。「19:10 いけません。私はあなたや、イエスの証しを堅く保っている、あなたの兄弟たちと同じしもべです。神を礼拝しなさい。イエスの証しは預言の霊なのです。」イエスの証しをすることが、預言をする時の御霊の働きなのです。預言が、イエス様を証しすることが中心となっています。いろいろな預言解釈がありますが、イエス・キリストの証しから外れたものは偽りであります。必ず、イエスという方の証しになり、そしてこの方から命の水を飲みなさいという福音になります。

5A 預言のことばの朗読と聞き守る者

³ この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを守る者たちは、幸いである。

黙示録には、幸いになる道が備えられています。それは、まず朗読することです。当時は、現代のような印刷術がありませんでしたから、手紙が諸教会に回って、それを指導者が会衆に読み聞かせる方法を取っていました。ですから、朗読して、それを聞いていくという営みはとても大切になります。読むことも大事ですが、これを朗読、そして聞くということが教会の中で行われる時に、初代教会と同じことをしていることになります。パウロがテモテに勧めました。「1テモテ 4:13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。」私たちは詩篇を交読していますね、礼拝で。とても大切な礼拝行為です。

そして、聞くだけでなく、「そこに書かれていることを守る者たち」とあります。私たちは聞いたら、それをしっかりと心に留めることが必要です。何か規則を守るというよりも、「保持する」と言ったほうがよいでしょう。例えば、私たちがダムを管理する作業員だとしましょう。ダムの水を、どんなことがあっても管理して、洪水を防ぎ、また水道への供給を絶やすことはありません。それと同じように、私たちがイエス・キリストの教えを保つのです。そうすれば、この方から出てくる生ける水が、絶え間なく私たちに流れ、私たちから溢れ、人々にも広がります。「そうではない！」とする誤った教え、誤った行動が押し寄せてきます。それでも、守るのです。これが初代教会がしてきたことであり、私たちのすることです。パウロはテモテに、「2テモテ 1:14 自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」と言いました。

そして、「幸いである。」と言っています。黙示録には、幸いの道が内蔵されている言葉がたくさん出てきます。「14:13 今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである」「16:15 裸で歩き回って、恥ずかしい姿を人々に見られることのないように、目を覚まして衣を着ている者は幸いである」(その他、19章9節、20章6節、22章7節、22章14節です。)それぞれに幸いの定義が書いてありますが、私たちは今、こうやって朗読し、聞いて、そしてしっかりと心に留めるのです。これは幸いなことなのです。

6A 時の接近

最後に、「時が近づいているからである。」とあります。

ここで使われている「時」はカイロスです。ギリシア語にはクロノスという言葉もあります。「クロノス」というのは、時計などで計ることができる時間です。今日は3月2日であるとか、何時何分であるとか、1時間は60分であるとか、そういう物理的、客観的な時間です。都会の人はほとんどこのクロノスに24時間縛られています。今は何時だから起きる、何時に会社に行く、何時だからお昼を食べる、何時だから寝なければならない、とか。

しかし、地方の農村や漁村の人は、今日はしけだから漁は休みだとか、今年は暖かいから早めに収穫の時期がきたとか、必ずしもクロノスに支配されているわけではないのです。時間ではなく、時機といったらよいでしょう、しるしを見て、行動に移すのです。そういう人たちには、クロノスばかりを考えた時間管理術などはまったく役に立ちません。今が何時何分であるか、何月何日であるかということよりも、今がどういう時であるか、この時にどんな意味があるのか、どんな価値があるのか、そのことを知ることが重要なのです。カイロスは、人間がつくったり、管理したりすることができない時間です。管理するのではなく、いつ訪れるか分からない時を待つこと、見極めること、捕らえること、それがカイロスという時間を生きることです。

そういった時が近づいていると、ヨハネは言っています。ヨハネだけでなく、主ご自身が、そして主の他の使徒たちが同じことを教えていました。これから黙示録を朗読していき、それをしっかりと守っていき、その中で今の時が、救いが近づいているということを知っていきたいと思います。国々は騒ぎ立ちます。天地も揺れ動きます。しかし、それは贖いが近づいているからに他なりません。その時は、物理的な時間ではないので、農夫のようにしっかりとその時季をつかんでいきます。